

□原著論文□

更生保護施設入所者の孤独感に関する研究
—その様相および推移に着目して—若林 馨¹ 小島 秀吾²

抄 録

我々は、更生保護施設入所者の社会復帰への支援を考察する手がかりとして、当事者の孤独感を評価した。まず、孤独感を感じる原因ならびにその関係性について因子分析を行った。結果、孤独感を感じる原因として3因子が抽出され、うち「抱えられる関係の不在」因子のみ退所時に値が低下していた。そのプロセスと原因の考察のため、次にインタビュー調査を行った。対象者は施設入所当初は自身を深く否定するものの、施設という安全基地＝疑似家族的な軸足と、雇用先など外の社会との行き来による相互作用体験の連続により、自分の再定義づけを行っていた。そして、自分の再定義づけができていくことが、孤独の原因を外的要因へ帰属させることを低減させ、自身の環境や感情を自身で抱えられることに影響を及ぼしていた。今後の社会復帰への心理的支援として、本人の孤独の原因帰属・対処方法への着目や、自己の再定義づけの中で起こる多様で複雑な葛藤への心理的サポート等が有用であると考えられる。

キーワード：更生保護施設、孤独感、社会復帰

I. はじめに

1. 問題の背景

1) 犯罪と社会的孤立

近年、罪を犯した人の再犯罪の増加が問題となっている。初犯者や刑務所初入者が減少傾向にある中、検挙人数に占める再犯者や刑務所入所者に占める再入者の比率は上昇傾向にあり、満期釈放者の約半数が出所後5年以内に再犯し刑務所に戻っている¹⁾。このことから、犯罪予防のためには特に再犯罪の予防が重要な役割を担うといえるだろう。これまでに犯罪の要因として指摘されているのは、社会的な要因として教育格差や地域社会の連帯感の弱まり、経済的要因としてワーキングプアや失業、心理的要因として心理的父親不在による欲求不満耐性能力の弱体化など様々である²⁾。まして再犯を重ねるほど、親族等との関係が疎遠になり帰住先の確保が困難化することや、前歴等の問題から就労先確保が難しくなることが挙げられ

る³⁾。こうした各種要因を取り除くべく、刑事施設収容中から刑事施設と保護観察所の間で、帰住予定地の家族・住居・就労環境の整備等の計画的な実施がなされている。しかし、それでもなお出所後すぐに生活上の困難を抱えると予測される人に対する施策の1つとして更生保護事業がある。同事業は、当該者が直面する住居、雇用、相談相手、その他当座の生活費などの様々な問題に配慮し、社会復帰の条件を緊急に整備してその再犯の危険性を除去しようとする目的で定められたものである。その中に規定された更生保護施設は「被保護者（刑事施設等出所者）の改善更生に必要な保護を行う施設のうち、被保護者を宿泊させることを目的とする」民間の更生保護法人が設置・経営する施設である。全国に103存在する同施設の入所者（H28の成人対象施設の定員は約2,000人、うち80%弱が男性⁴⁾）には、刑務所累入者、十分な教育を受けていない人、保護観察中や親族から支援が見込めない人が多

受付日：2018年11月19日 受理日：2019年7月1日

¹ 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉心理学分野 博士課程

Division of Clinical Psychology in Health and Welfare, Doctoral Program in Health Sciences, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare

17s3067@g.iuhw.ac.jp

² 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉心理学分野

Division of Clinical Psychology in Health and Welfare, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare

い。更生保護施設では、入所者の社会復帰に向けて食事提供や就労支援、生活相談などのサポートが行われる。

一方で、平成24年に犯罪対策閣僚会議において提出された「再犯防止に向けた総合対策」³⁾では、「刑務所出所者等が社会とのつながりが希薄化するなどして犯罪に至る」ことに触れ、社会における居場所を失っていると思われる者、いわば「社会的孤立」型に該当する者を孤立させないよう配慮することが再犯防止に有効としている。孤立と犯罪の関係性について、Hirschi⁵⁾は人が社会との絆を希薄に感じているほど逸脱行動に走りやすいと述べている。

2) 当事者の感じる孤独とは

ところで、もし犯罪抑止として孤立化の解消やつながりの構築・強化が必要とされるのであれば、当事者自身がつながりの欠乏の認識を抱いていたり、孤立に曝されていると感じていることが前提となるだろう。その前提を抜きにした孤立解消やつながり構築は、施策のスローガンの一方的な押し付けになってしまう危険性がある。孤立という状態に対し、当事者の陥っている状況と心理的側面との相互関係性に着目することが必要不可欠である。

Weiss⁶⁾は、孤立を情緒的孤立(emotional isolation)と社会的孤立(social isolation)に区別した。前者は愛情や親しい関係の欠如に由来するもので、子どもの分離不安に近似した不安感、いらだち、わびしさなどの感情を伴うものである。後者は協同関係、共同体との同一性(identity)の欠如に対する反応で、たいくつや仲間はずれの感情と結びついている。その後の研究で、2種の孤立には高い相関があるとするClintonら⁷⁾の調査結果が示されている。

以降、孤独感の研究が進み、これまで様々な定義づけがなされてきたが、Peplauら⁸⁾によれば、それらの考え方は3つの点で一致を見ている。第1は孤独感は個人の社会的関係の欠如に起因するという点、第2は孤独感は個人の主観的体験であるという点、第3は孤独感の体験は不快であり苦痛を伴う点である。

以上のことから、出所者の社会適応への支援という観点から見れば、更生保護施設入所者の社会的孤立状

況と心理的側面の両面を考察することが必要と思われる。だが、対象者に関する先行研究はまだ数少なく、上記の両面に焦点をあてた研究はほとんど見当たらない。

本調査では、対象者の孤独感を考察する上で以下の3点に着目する。まず、仮に個人が孤独を感じているのであれば、なぜそれを感じているのか。主観的孤独感を調査したPeplauら⁹⁾は、個人が孤独感を対処する際、内的で不安定な原因への帰属は孤独への積極的対処を喚起し、安定した原因への帰属は消極的対処を生じるとしている。広沢¹⁰⁾は大学生を対象に孤独の原因について因子構造を調査し、その結果、孤独の原因は「積極的な対人接触の欠如」「対人的疎外」「機会の欠如・環境の変化」「対人恐怖」「考え方の相違・性格」の5因子であるとしている。犯罪からの社会復帰においては、現在様々な更生プログラムが開発されているが、その中でも自身の感情や行動パターンを絶えず振り返り修正していく認知行動的なアプローチが効果的であるといわれており、対象者が自己の感じる孤独感への対処方法を考える上で、その帰属をどこに見ているのかを探ることは重要と考えられる。

次に、その個人はどのような関係性の中で孤独を感じているのか。広沢¹¹⁾は大学生を対象に異なった関係における孤独感の調査を行い、「恋愛関係」「集団(サークル)での関係」「友人関係」「家族関係」の4因子構造を見出し、青年期においては孤独感に友人関係と最も密接に関連していた。対象者はそのほとんどが親族と疎遠であり帰来先の無いことを鑑みると、家族関係を主とした孤独感が見出されるものと推測される。

最後に、孤独感はどのように変化するのか。更生保護施設入所者の施設入所から退所までの経過には、就労や対人関係など様々な社会的接触の頻度が増していくことが考えられる。もし対象者の入所時と退所時の孤独感に変容するのならば、それを調査することによって、必要な社会的接触の具体的な中身を考察していくことができるだろう。

2. 本調査の目的と意義

本調査では更生保護施設入所者の主観的な孤独感の

様相を考察したい。そこで、「孤独感は、社会的関係における相互作用の達成レベルと願望レベルの不一致から生じる、不快で苦悩を与える主観的経験」¹⁰⁾との定義を用い、孤独感とは人の社会的関係が量的あるいは質的にある重要な面で不足しているときに生じる不快な体験であるという立場をとる。そして、まず、その孤独感の構造と施設生活期間の変化を数量的に比較する。その後、その変化のプロセスを質的に探索する。

更生保護施策では、社会復帰に至るまで如何に支援者が彼らを取り巻く環境を調整していくかが重要とされている。対象者本人が自身の孤独をどのように感じており、施設から地域生活への移行までにどう変化するかかの理解ができれば、今後の社会復帰における臨床心理的サポートへの有効な示唆となるのではないかと考える。

II. 調査1 更生保護施設入所者の孤独感の様相—孤独感尺度による検討

1. 目的

更生保護施設入所者における孤独感の構造を因子分析等によって探索するとともに、施設入退所での変化を検討する。

2. 方法

1) 調査対象者

本調査の対象は、更生保護施設入所中の者である。しかし、入所者によって入所期間にバラツキがあり、それによって孤独感と社会的相互作用の認知の変容に違いが出るのが予測されたため、更生保護施設入所者の87.2%の者が6か月未満で退所しており、平均在所日数は77.4日(H25時点)⁴⁾であることを考慮し、入所期間が約3~6か月程度の見込みとなる者に対象を絞った。

具体的には、東京23区内にある成人男性対象の更生保護施設12か所中11か所から紹介を受け、研究協力への了承を得た入所者および退所予定者の男性を対象にアンケート調査を行った。

2) 調査実施期間

2015年12月~2016年7月。

3) 倫理的配慮

本調査の実施については、国際医療福祉大学の倫理審査委員会において承認を受けた(承認番号:15-Ig-67)。また、調査対象者には事前に本調査の目的を説明し同意を得た。調査の説明書には、個人対応表は暗号化を行い、個人が特定されることはないこと、答えにくい質問には答えなくて良いことなどを記載し協力を求めた。また、質問紙への回答を施設職員などに見られる不安をなくすため、回収に際しては入所者各自が封筒に入れて中身が見えることのないように配慮した。

4) 調査手続き

同一対象者に2回の調査を行なった。新規入所時には、入所当日~5日以内に施設職員から調査の説明文、同意書、質問紙を手渡した。退所時には、退所日より数日前に同様の手続きで施行した。

5) 調査方法

i) フェイスシート:入所日、退所予定日、生年月、イニシャル、生存家族、仕事の有無と業種、刑務所入所回数、直近の罪名

ii) 視覚的アナログスケール visual analog scale (VAS): 模擬例を併記し、「あなたが普段感じている孤独感はどのくらいですか」と教示し実施。VASは11cmとし、0cmの地点を「全く感じない」、11cmの地点を「非常に感じる」とした。

iii) 孤独の原因に関する質問紙(広沢)¹⁰⁾:「あなたはどのようなときに孤独を感じますか、孤独に陥る原因としてどのようなものがあると思いますか」と教示し実施。「人から拒絶されるのではないかとこの恐れを抱いているため」「物事を悲観的に考えすぎているため」などの計18項目、4件法。孤独に陥る原因と思うほど得点が高くなる。

iv) 異なった関係における孤独感尺度(修正版)(広沢)¹¹⁾:「あなたにどれくらいあてはまりますか」と教示し実施。家族関係、友人関係、恋愛関係、コミュニティ(ここでは職場)内関係の各10項目、計40項目、

4 件法. 孤独感が高いほど得点が高くなる.

なお, iii), iv) の尺度使用に当たっては, 尺度作成者よりメールにて使用許諾を受けた.

3. 結果

187 名の入所者から回答が得られ, 分析には回答に不備があったものを除いた計 151 名 (平均年齢 46.9 ± 13.5 歳) を用いた. そのうち, 退所時にも回答が得られた者は 19 名であった.

1) 孤独の原因に関する構造の特徴

孤独の原因に関する質問紙 18 項目の平均値および標準偏差を算出し, 天井効果, フロア効果の検討を行い, 各項目の得点に偏りが認められないことを確認した. そして, 初回の因子分析を行い, 固有値の減衰状況と解釈可能性から 3 因子構造が妥当であると判断し, 最尤法・Promax 回転による因子分析を行った. 十分な因子負荷量 (因子負荷量の基準「.35」) を示さなかった項目 1 項目を分析から除外し, 最終的に 17 項目が残った. 最終的な因子分析結果と因子間相関を表 1 に示す. 3 因子構造の累積寄与率は 53.065%, 3

因子間相関は .460 から .665 の値を示した.

因子 1 への負荷量が高い項目内容は, 孤独に陥る原因として, 自身の性格や考え方, 生活の背景等が周囲の人間とズレがあるという内容であった. こうした内容から, 因子 1 を【周囲との齟齬感】とした.

因子 2 への同項目内容は, 他人に歩み寄っても拒絶されるのではないかと, 拒絶されない様により良い自身を演じようとするため, といった内容であった. よって因子 2 を【否定されることへの恐れ】とした.

因子 3 への同項目内容は, 身近な人との別離や生来の原家族に問題があるといった, 無条件に自身を受けとめてくれるような環境の喪失や, 情緒的に距離の近い間柄の不在のためという内容であった. よって因子 3 を【抱えられる関係の不在】とした.

α 係数は因子 1 から順に, $\alpha = .843$, $\alpha = .784$, $\alpha = .754$ となり, 十分な信頼性が得られた.

2) 異なった関係における孤独感の構造の特徴

異なった関係における孤独感尺度 (修正版) 40 項目の平均値および標準偏差を算出し, 天井効果, フロア効果の検討を行い, 各項目の得点に偏りが認められ

表 1 孤独の原因の因子分析結果 (最尤法、Promax 回転)

項目	因子		
	1	2	3
周囲との齟齬感 ($\alpha = .843$)			
11 自分が積極的に友だちを作ろうとしないから	.966	-.066	-.132
12 自分自身の性格のため	.756	-.067	-.082
7 自分には友だちができないと思いつているため	.637	.133	.059
13 人からの愛情や信頼が信じられないため	.576	.078	-.009
18 友だちを作る機会に恵まれていないため	.479	.111	.183
8 まわりの人たちの考え方と, 自分の考えが異なっているため	.444	.157	.076
4 たまたま自分のそばにいるのが知らない人ばかりだから	.401	-.113	.183
5 自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから	.354	.272	-.054
否定されることへの恐れ ($\alpha = .785$)			
1 人から拒絶されるのではないかとこの恐れを抱いているため	-.144	.853	-.027
2 まわりにいる人たちが自分を仲間に加えようとしてくれないため	.137	.786	-.237
16 自分を格好よく見せようとするため	-.021	.465	.117
6 物事を悲観的に考えすぎているため	.153	.433	.226
17 自分を頼りにしてくれる人がいないため	.075	.429	.239
抱えられる関係の不在 ($\alpha = .754$)			
15 身近な人との別離があったから	-.208	.061	.935
3 家庭環境に問題があるため	-.020	-.057	.633
14 自分に頼れる人がいないため	.313	-.067	.552
10 自分のそばに誰もいないから	.318	-.050	.409
因子相関	1	-	.665
	2	-	.460
	3	-	-

ないことを確認した。そして、初回の因子分析を行い、固有値の減衰状況と解釈可能性から4因子構造が妥当であると判断し、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量（因子負荷量の基準「.35」）を示さなかった項目10項目を分析から除外し、最終的に30項目が残った。最終的な因子分析結果と因子間相関を表2に示す。4因子構造の累積寄与率は50.083%、4因子間相関は.069から.477の値を示した。

因子1への負荷量が高い項目内容は、すべて恋人という特定の関係に含まれるコミュニケーションの相互作用における孤独感を示していた。よって因子1を【互いを必要不可欠とする恋愛パートナーとの関係】とした。

因子2への同項目内容は、友人関係の存在と欠如、自身への関心の希求、接近と回避などの相互作用における孤独感であった。そのため因子2を【気のおけな

表2 異なった関係における孤独感の因子分析結果（最尤法，Promax回転）

項目	因子			
	1	2	3	4
互いを必要不可欠とする恋愛パートナーとの関係 ($\alpha = .941$)				
6 恋人は私の心の支えである。(*)	.936	-.101	-.020	.086
7 私は恋人の心の重要な部分を占めていると思う。	.928	-.024	-.056	.071
8 恋人とはお互いに人格を認めあっている。(*)	.901	-.027	-.039	.065
9 恋人は本当の私を理解してくれていると思う。(*)	.834	.075	.030	.021
10 恋人には素直に自分の気持ちを表現できる。(*)	.827	-.100	.042	.079
5 どんな時でも恋人だけは私の味方である。(*)	.821	.060	.078	-.030
4 私は恋人のことをもっと知りたいと思う。(*)	.773	-.044	-.020	-.146
3 私はできるだけ恋人といっしょにいられるように努力している。(*)	.678	-.018	.036	-.074
2 私には現在、とても大切な恋人がいる。(*)	.486	.082	-.058	.074
気のおけない友人関係 ($\alpha = .781$)				
29 私には心を開いて話せる友だちがあまりいない。	.010	.884	.001	-.024
26 私には困った時に助け合える友だちがあまりいない。	-.042	.852	.025	-.032
30 私の考えや気持ちを理解してくれる友だちは、ほとんどいない。	-.004	.813	.062	.077
25 同じ目標に向かっていっしょに努力できる友だちがほとんどいない。	-.021	.794	.045	-.061
21 私のまわりにはあまり多くの友だちがいない。	.010	.685	-.180	.050
28 私の友情は結局はうわべだけのものにすぎない。	.058	.548	.016	.143
23 自分から友だちを作ったり好かれようと努力しても思うようにはうまくいかない。	-.061	.476	-.131	.151
22 私には気心の知れた友だちがいる。(*)	-.159	-.376	-.232	.215
17 職場の人たちは私の考えや感じていることに関心がない。	-.135	.362	-.005	.190
協働できる所属集団内の関係 ($\alpha = .848$)				
31 私は家族の一員だと心から感じる。(*)	-.118	-.156	.887	.129
32 私の家族はお互いのうちとけて、うまくいっている。(*)	-.057	-.090	.848	.058
36 私の家族はいつもお互いに助け合っている。(*)	-.038	-.033	.785	.113
39 私は家族と話す時間を大切にしている。(*)	.042	.019	.603	.098
24 私は友だちとより親密になれるように努力している。(*)	.106	.130	.479	-.152
16 職場ではみんなと力をあわせて活動している。(*)	.163	.017	.473	-.195
13 私は職場にとけこめるように自分から努力している。(*)	.193	.144	.396	-.024
自分が承認されている家族内関係 ($\alpha = .836$)				
38 家族は私の意見をあまり尊重してくれない。	-.014	.013	-.014	.926
37 家族は私の能力や可能性を認めていないと思う。	.084	.036	-.044	.886
40 家族の誰も、本当に私を理解しているとは思わない。	-.006	.076	.126	.639
34 私は家族に対して自分をあまり出していない。	.060	.105	-.023	.465
33 家族は自分たちのことに忙しくて、私のことにはかまわない。	.004	.039	.131	.443
因子相関	1	—	.236	.477
	2		—	.304
	3			—
	4			—

(*)は逆転項目。

い友人関係】とした。項目17「職場の人たちは私の考えや感じていることに興味がない」は「職場の同僚に求めるべき以上の」自身への理解・関心や距離感の近さを求めているものと考え、【気のおけない友人関係】に加えても差し支えないものと考えた。

因子3への同項目内容は、7項目中4項目が家族、2項目が職場、1項目が友人との関係性を示し、異なる関係を示すものであった。しかし、その相互作用性の次元では、自身が所属する集団内での自他相互の協力関係を表していた。よって、因子3を【協働できる所属集団内の関係】とした。

因子4への同項目内容は、数が少ないもののすべてが家族に関しており、家族からの評価や承認、理解を必要とする内容を表していた。そこで、因子4を【自分が承認されている家族内関係】とした。

α 係数は因子1から順に、 $\alpha = .941$, $\alpha = .781$, $\alpha = .848$, $\alpha = .836$ となり、十分な信頼性が得られた。

3) 孤独感の入退所での推移

施設入退所時での孤独感の変化の有無を検討するために、ii)~iv)の質問紙のそれぞれの得点の合計に関して、入退所時の値でWilcoxonの符号付き順位検定を行った。結果、「抱えられる関係の不在」因子のみ5%水準で有意な差が認められ、退所時の方が孤独感が低くなっていた。得点および検定の結果を表3に示す。

表3 孤独感の入退所での推移

	<i>n</i>	入所時	退所時	<i>z</i> 値	符号	
VAS(mm)	19	59.42 ± 27.33	49.05 ± 33.49	-1.22	n.s.	
孤独の原因		周囲との齟齬感	16.42 ± 3.82	15.63 ± 4.81	- .55	n.s.
	19	否定されることへの恐れ	11.11 ± 3.09	10.47 ± 3.82	- .99	n.s.
		抱えられる関係の不在	9.63 ± 2.50	8.32 ± 2.21	-2.05	*
異なった関係における孤独感		互いを必要不可欠とする恋愛パートナーとの関係	29.21 ± 7.31	28.84 ± 8.29	- .53	n.s.
	19	気のおけない友人関係	22.37 ± 4.79	21.47 ± 6.88	- .44	n.s.
		協働出来る所属集団内の関係	23.00 ± 6.68	21.26 ± 5.72	-1.37	n.s.
		自分が承認されている家族内関係	11.84 ± 4.21	10.79 ± 4.57	-1.20	n.s.

Wilcoxonの符号付き順位検定

* : $p < 0.05$

4. 考察

本調査では対象者の孤独感を、孤独の原因、関係性、施設入退所での変化の3側面から検証することを目的とした。以下に考察を述べる。

1) 孤立の種類・原因

孤独の原因については【周囲との齟齬感】【否定されることへの恐れ】【抱えられる関係の不在】の3因子が抽出された。これをWeissによる情緒的孤立と社会的孤立の区分に照らしてみると、【周囲との齟齬感】因子は協働関係や共同体との同一性の欠如に対する反応であるため社会的孤立に、【否定されることへの恐れ】因子と【抱えられる関係の不在】因子の内容は愛情や親しい関係の欠如に由来する項目となっているため情緒的孤立に区分されると考えられる。つまり対象者の感じる孤独感は、社会内集団での孤立に由来する面と、受容的・親密な関係の欠如に由来する面の双方を含んでいることが推察される。

更生保護施設入所者は、自身に対し“人とは違う”という【周囲との齟齬感】による社会的孤立を感じる。これは、一般の人々と比して「罪を犯した者」としての自身を強く認識しており、他方では施設の他入所者に対しても共通意識を持ち難いからなのではないだろうか。共通意識の持ち難さについては、Paugam¹²⁾が、スティグマ化された人々が自分たちに与えられるネガティブなイメージに対して集団的に抵抗しようとしないうち、集団への帰属感情の欠如が見られると述べている。

また、情緒的孤立として、周囲の人間から【否定されることへの恐れ】【抱えられる関係の不在】を感じる。Jones¹³⁾は「孤独な人々が広い範囲の自己卑下を行っており、他者から拒否されることを推測している」ため、「孤独な人々は予測される拒絶を避けるために、持続的な接触への関心をあまり示さない」と指摘している。更生保護施設入所者は、罪を犯したこと等の前歴を隠して生活していることが少なくない。それは、過去が明らかになると周囲の好奇の目に晒されたり、就労上の不利益な取り扱いを受けたりすることがあるからである。そういったリスクをできるだけ回避しようとするため社会や集団から距離を取るようになる。

2) 孤立を感じる関係性

異なった関係における孤独については、【互いを必要不可欠とする恋愛パートナーとの関係】【気のおけない友人関係】【協働できる所属集団内の関係】【自分が承認されている家族内関係】という4因子が抽出されたが、広沢⁹⁾の結果と比較検討すると、恋愛、友人、家族の各関係因子に対応すると考えられる3因子はあるものの、各因子を構成する項目に若干の違いがあった。また、コミュニティにおける関係に相応する職場内関係に対応する因子は見出せず、代わりに【協働できる所属集団内の関係】が示され、孤独を感じる場としての職場の特異性は低いことを示していた。このことから、対象者が社会内で築いている関係性は一般の

人が持つ対人関係に当てはめて考えることが難しいこと、また、職場に関しては深い関係性を望んでいない可能性、および自身が対等な存在として認められ協働できる関係が不足している可能性があることが示唆された。

3) 入退所時の孤独感の比較

入退所時での孤独感の総量に統計的に有意な変化は見られなかった(VAS値:入所時59.42±27.33,退所時49.05±33.49で有意差無)。つまり、施設入所の数か月～約半年の期間の中で、たとえサポートや雇用先があったとしても、主観的に感じる孤独感には増減が無かった。このことは、社会的接触の頻度や数は孤独感に直接的な影響を及ぼさないというCatrona¹⁴⁾、松本ら¹⁵⁾の先行研究を支持するものである。

他方、個々の因子で見ると、孤独を感じる原因としての【抱えられる関係の不在】因子のみ退所時に値が低下していた。なぜ当因子のみが変化したのか、その要因および背景を明らかにするため、引き続き以下の調査を行った。

Ⅲ. 調査2 更生保護施設入所者の孤独感と社会的相互作用の関係—語りを用いての調査

1. 目的

更生保護施設入所者が施設入所から自立退所するまで、孤独感と社会的な相互関係をどのように捉え、自

表4 対象者の属性

	年代	入所期間	就労先	退所先	罪種	服役期間	生存家族	結婚歴	収監前
1	60代	6か月	清掃工場 の事務	アパート	窃盗(1)	2年半	姉	無	ネットカフェ
2	30代	3か月	塗装	アパート	覚せい剤(1), 傷害(1)	1年半	兄, 妹	無	一人暮らし
3	60代	6か月	清掃	住み込み	強盗	8年	兄	無	住み込み
4	50代	7か月	建築	アパート	強盗	14年	両親, 元妻, 子	有	一人暮らし
5	20代	6か月	建築	実家	窃盗	3年半	両親, 弟	無	知人宅
6	20代	6か月	建築	社員寮	窃盗	6年	両親, 妹, 弟	無	飯場
7	50代	6か月	派遣	マンション	覚せい剤(2)	1年半	兄, 叔母	有	一人暮らし
8	50代	6か月	清掃	実家	窃盗(2)	2年半	兄	無	知人宅
9	50代	5か月	販売	社員寮	覚せい剤	2年半	母, 元妻, 子	有	一人暮らし

いずれも更生保護施設入所は初。罪種の()は過去含めた逮捕歴。

立へ向かうのかについて本人の語りを用いて調査する。

2. 方法

1) 調査対象者

本調査の対象は、更生保護施設入所者のうち就労自立して退所することが明確となっている者である。具体的には、東京23区内にある更生保護施設11か所から紹介を受け、研究協力への了承を得た、帰住先を確保して退所することが間近である男性入所者10名を対象にしてインタビューを行った。そのうち本研究では9名(平均年齢47.3±15.0歳)を分析対象とした(表4)。

2) 調査実施期間

2016年3月～6月。

3) 倫理的配慮

本調査計画についても、本学の倫理審査委員会において実施の了承を受けた(承認番号:15-Ig-67)。また、調査協力者には調査開始前に研究目的、手続き、個人情報保護、協力辞退が可能であることを書面と口頭にて説明し、同意が得られたことを署名にて確認した。

4) 調査方法

上記の対象者に対して半構造的インタビューを行った。その際、同意を得た上で録音し、その後、名前や施設名、場所などの固有名詞を匿名化し逐語録化したものをデータとした。「孤独を感じた経験はありますか、どんな時に感じますか」など大まかなテーマで自由に語ってもらい、その話の流れの中で調査1【抱えられる関係の不在】に関係がありそうなものがあれば、孤独感を感じたその状況や相手について必要にあわせて質問しさらに詳しく語ってもらった。調査は対象者の入所する施設で行い、時間は一人につき1時間半程度であった。

5) 分析の方法

得られたインタビューデータは、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)」を用いて分析を行った¹⁶⁾。

M-GTAの要点は、まずデータから分析の最小単位である概念を生成する。その上で、概念の集合体であ

るカテゴリーを生成し、カテゴリー間の関係を統合して、対象である事象を説明する図式としての理論をまとめあげていくことにある。手順としては、まずデータの関連か所について、解釈的な作業をしながら概念を作っていく。その際、分析ワークシートの理論メモの欄に、自身の解釈作業における疑問点、分析上のアイデア、他の解釈の可能性などの思考過程をメモし、ここで生成された概念の定義、具体例を記入していく。具体例がその後の分析の中で増えていけば、この概念の説明力は高いと判断される。同時に、類似例や対極例などとの比較思考を行うこと、思考をその都度記録し外在化することで、判断の根拠が明らかになり、解釈が恣意的に偏って進む危険を防ぐ。こうして概念の生成と有効性のチェックを行うと同時に、複数の概念の相互関係から、概念のまとまりであるカテゴリーを生成する。そしてこれら複数のカテゴリー間の関係を統合して理論をまとめていく。

本論文では、記述した内容が妥当であるか、当研究法の研究者によるスーパーバイズを、テーマ設定と概念生成初期の時点、およびプロセス図が完成した時点の計2回で受けた。

6) 概念生成の例

概念生成の1例を示す。「カップルとかね、そういうの、親子とか、見てるとやっぱ、自分今一人やなーなんて思うとちょっと寂しくなりますけど。ま、今だけやして、自分に言い聞かせて、やっています」(事例2)。筆者はこの部分を、寂しいという感情を敢えて考えないようにしていると解釈し、定義：頼る先がない状況に対して寂しいという感情に留まり続けないために脇に置くようにしたり、長期の孤立で寂しさを感じないようにしていたりすること、概念名：寂しさのやり過ぎとした。類似例には、寂しいと思っても「なるべくこう考えないようにしてるんだよね」、家族を空想して「自分を誤魔化してる」などの例があった。理論メモには、①そう思うことで前を向く原動力になる、②入所前にどれだけ他者と接していたかにもよる、③拘留期間にもよるかもしれない、等記入した。

3. 結果と考察

修正版 M-GTA では、質的データの解釈をしながら分析を進めるため、分析結果と考察をまとめて報告する。本論では、カテゴリーを<>で囲み、概念を下線で示している。コアとなる概念のみ下線に加えて□で囲ってある。

分析結果の概要を述べる。更生保護施設入所者の孤独感の入所から自立退所までの変化のプロセスを理解するための中心概念は、施設と雇用先という2つのフィールドを行き来する中での自分の再定義づけである。対象者は、逮捕・拘留～施設入所時には自身について<現状納得の言い聞かせ>をし、過去と現在の自身を否定せざるを得ない<自己像の揺らぎ>を経験する。しかし、通過施設という一時期だが安定した場の中で<やるべき事への意識>に追い立てられ<向き合うことの一時保留>をするうちに、徐々に施設の<利用できる面への気づき>が起り、施設を軸足として雇用先という社会に触れることが可能となる。その<相互作用体験の蓄積>により<身近な現実感>と<置かれた状況の引き受け>が成され、その結果自分の再定義づけを行うことができるようになる。定義づけられた自身という土台を得ることは、不安を抱えつつも自身の方向を納得させ、<社会復帰への内的準備>を行うことを可能にする。

カテゴリーと概念の関係を図1に示す。なお、矢印の向きは必ずしも一方通行なものではなく、概念の相互作用を通しカテゴリー間を行き来しながら進んで行く。

1) 自分の再定義づけ：生きなおすための自分を創るプロセス

まず、キーとなる概念を説明する。入所者は帰住先や頼るつての無い状況で入所し、自身に“犯罪者・迷惑者”というラベルを張りつけている。だが、調査対象者たちが口にしていたのは、施設生活や就労を経て自分自身の姿をとらえなおす体験であった。ある対象者は就労先で信用されかけてきた今の自身について「(以前は自身に駄目のレッテルを貼っていたが)今度は信用ってレッテル貼ろうと思っていて」(事例9)、別な対象者は施設での人間関係が思っていたよりも円

滑にできたことを「ちょっと、人並みになれたかなあ」(事例1)と述べた。そこで、このこと概念名を自分の再定義づけとし、「入所する以前や入所直後は否定的・曖昧だった自己像を、今後に向けて肯定的にとらえなおすこと」と定義した。田辺ら¹⁷⁾は、刑務所出所者へのインタビュー調査から、犯罪から回復する者がその関係性の中で自分の過去を一連のストーリーとして形成し語っており、新たな役割を獲得していることを見出した。また、その結果を Veysey¹⁸⁾の「犯罪からの立ち直りには自分の物語におけるアイデンティティの変容が関係している」とも一致するとした。自分を再定義づけるという行為は、犯罪からの回復における初期の段階として、役割獲得やアイデンティティ変容の基盤となる働きを担うのではないだろうか。

次に、対象者がどのように自分の再定義づけをしていったのかを主な概念を元に報告する。

2) 施設＝安全基地の中で

対象者にとって施設は必ずしも理想的な環境ではない。しかし、以降のプロセスを経ることができたのは、当面の食と住の心配が無い施設を基点とし、それを“安全基地”としながら動き回ることができたからである。相良¹⁹⁾は、更生保護施設を犯罪・非行からの「立ち直り」上の「移行儀礼」を行う場として捉え、移行に伴う不安定な状況から身を守り、儀式終了までを保障する場となることを指摘している。本調査においても、対象者の話から、たとえ社会的関係でつまづいても一定期間戻ってこれる場所があるということが大きな安心感に繋がるということが読み取れた。

① <現状納得の言い聞かせ>

出所後、対象者は「刑務所出たばかり位の時には、なんかもう人生終わりだなんて」(事例1)、「要はすべて失った訳ですから」(事例9)といった底辺まで落ちた感覚を経験する。そして「自分が悪い事して刑務所に行くんでね、それで支援だの、そんなん甘ったれでしょ」(事例2)など、サポートが無いのは自分に原因があり自業自得であると自らを納得させようとする。

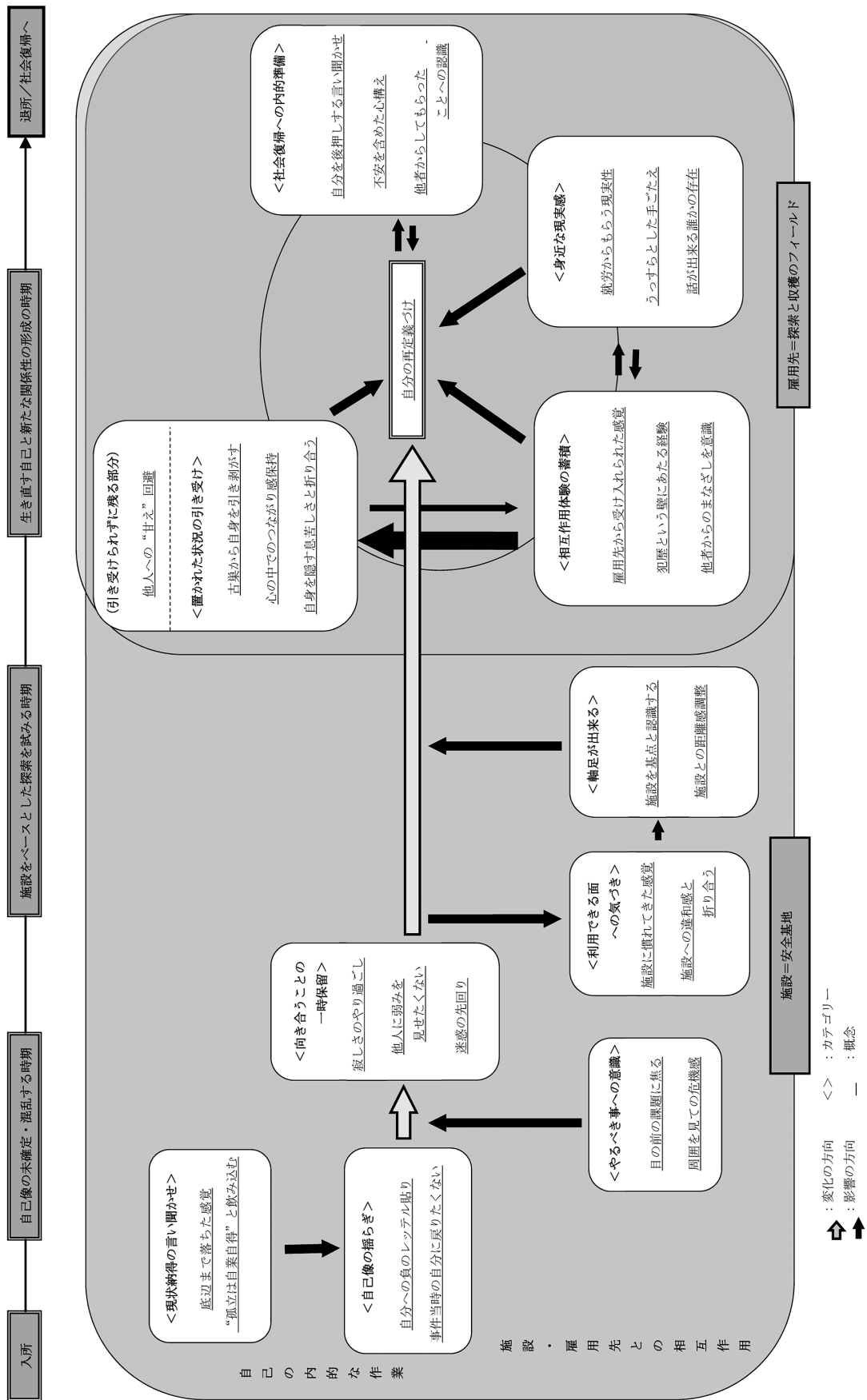


図1 更生保護施設入所者の孤独感と社会的相互作用のプロセス

② <自己像の揺らぎ>

①から「社会から外れちゃった人間ですからね」(事例8)と自分へ負のレッテル貼りを行う。また、家族との別離や様々な喪失体験から「捕まる前みたいな生活はもうしたくない」(事例2)と事件当時の自分に戻ることを否定する。過去と現在の自分双方に肯定的な感情を抱けない中で、自立へ進むための自身を模索する。

③ <やるべき事への意識>、④<向き合うことの一時保留>

その様な中で「ぼーっとしてられないんで、ま、取りあえず仕事見つけてお金貯めて」(事例3)と目の前の課題に焦ったり、「こんな奴らといたら俺腐っちゃまうなと思って」(事例8)など、他入所者と違っていなければ駄目になるという周囲を見ることからくる危機感が、求人誌を読んだり元の雇用先に掛け合ったりという<やるべき事への意識>を生み出す。この意識は、対象者が自身の問題の深みに陥らないでやり過ごすことに寄与し、新しい状況や頼る先がない状況に対して寂しさを考えないようにしたりと寂しさをやり過ごす。

⑤ <利用できる面への気づき>

③④を経るうち「思っていたよりもきつくない」(事例1)、「刑務所出てきた人が生活しているんだから、下ごしらえみたいなのができる訳ですよ、心の準備が」(事例9)という慣れてきた感覚を持つようになる。施設への満足とはいわないまでも「ちょっと我慢すれば、もうそれで日にち来ればここを出るんだから、それまで我慢すればいいことだから」(事例3)、「会社の寮だって例えば規則あって…そういう風に思う様にすればいいかな」(事例7)と妥協点を見つけ、施設への違和感と折り合うようになる。

⑥ <軸足ができる>

⑤の気づきを得ると、「仕事与えてもらって、食事朝と夜、ね、もらって、寝るところもある、余計な金使わないで済む、すると金は残せる、ある程度貯金ができる」(事例3)、と施設の実用面に視点が移り施設を基点と認識するようになる。すると、一定期間住む

のであれば「みんなと仲良く、当たり障りなく、まあ職員とも喧嘩せず、そんなカリカリしててもしゃーないし」(事例2)など、自身の使い勝手の良いように施設との距離感の調整を行うようになる。

3) 雇用先=探索と収穫のフィールド

施設という安全基地があることで、対象者は求職や新たな対人関係など、成功と失敗双方の体験を含んだ“経験”という収穫を得ることができていた。外の社会や新たな関係に何度も足を踏み入れ、試行錯誤をしながら収穫を得ることが自分の再定義づけを形成していくことに寄与していた。

⑦ <相互作用体験の蓄積>

それまでの収監中や出所後の対人接触が希薄だった対象者は、对人的相互作用を経ることにより徐々に変化していく。「雇い主の方がそういう経歴を分かっている…上で採用してくれて」(事例9)と、自分を受け入れてくれる雇用先と出会うことも大きなきっかけとなる。その中では「ドラマとかよく出てくるようなその刑務所のなんかそういうシチュエーションとかでいじられたりとかしてましたね」(事例5)と犯歴による嫌な体験も少なからずある。しかし関わりを重ねていくにつれ、「態度で示して真面目にやっていますの、を、やっぱ、やれば、動く人は、ね、いてると思うんで」(事例2)と、自身に対し何らかの目配りをする人がいることを意識するようになる。

⑧ <身近な現実感>

⑦において「思いがけないで、こういう仕事に就いて収入を得られることになったことで、ま、これを土台になんとか生きていけるかなって目標ができたから」(事例6)といった具体的な何かを手にすることが身近な現実性やうつつらとした手ごたえを引き起こす。

⑨ <置かれた状況の引き受け>と<引き受けられずに残る部分>

段々と現実感と手ごたえが大きくなっていく程、保留していた自身の感情や状況を吟味する余地が生まれる。「自分で切りましたね。連絡したらまた前の自分に戻ってしまうんで。それじゃ変わらないし」(事例2)

等、再び罪を起ささないためには寂しさの痛みを伴いつつも罪を犯した過去の自身に近い縁を切っていかなければならないという置かれた状況の引き受けをする。新しい関係を築きながらも犯歴を隠さざるを得ない場面もあり、その隠し通す苦しさと折り合うようになる。一方で、「本来助けてもらおうなどと思ってる事自体が逆に言っておかしいんじゃないかって」(事例1)と、サポートの享受を自分の弱さに還元する他人への“甘え”回避も依然として見られる。

⑦～⑨の相互作用を通し、対象者は自分の再定義づけを徐々に行っていく。

⑩ <社会復帰への内的準備>

自分という土台が定義づけられると、社会復帰に向けての内的準備に繋がっていく。「今我慢しなきゃいけないっていうのは、自分に言い聞かせるっていうか」(事例9)、「寂しさよりは、逆に…今の自分っていうか、この先がちょっと楽しみなんで」(事例5)と、これからの自分の方向を後押しするように自分を言い聞かせるようになる。そこには今後への不安を抱えつつも退所へ心構える姿勢が見られる。また、「俺はある程度恵まれてるみたいな感覚でいますね」(事例4)や「(施設が役に)立ってますよね、今ここにいられる訳だから」(事例8)という他者からしてもらったことに対する認識が生まれる。

全過程を通じ、対象者は当初の自己像の揺らぎを感じる状態から、施設を母体とし外部との相互交流を積み重ねていくことで、生き直していく主体としての自分の再定義づけを行い、社会復帰に向けた自身の心の整備を行うことができる状態へと変化していく。

IV. 全体の考察とまとめ

1. 更生保護施設入所者の抱く孤独感とそれにまつわる問題

Weiss⁶⁾は、長期にわたる孤独感は「人をとりまく状況や感情の評価の基準を変えさせる。特にこの基準は荒涼たる現実と一致する傾向がある」と述べる。調査協力者の「寂しいとあって、多分俺の中には無い。って言うのは、刑務所の中で1年何か月かツトメたけ

ど、ずーっと独居生活なんですよ」という言葉からは、収監された者がその状況に自身を適応させていき、それが出所後も継続しているという過程が読み取れる。Peplau⁸⁾は、人が孤独感を克服するには、満足すべき社会的関係を何らかの方法で確立することが必要であるとして、「認知している社会的関係の欠如を重要視しなくする」人々が「不満足な感情や孤独感を否定したり、社会的関係の重要さに価値をおこうとしない」可能性を示唆している。更生保護施設入所者の持つ孤独感の特性の1つはこうした「孤独の価値下げ」である。

2. 更生保護施設入所者の孤独感へ社会的相互作用がもたらす影響

調査1では、本人が考える孤独を感じる原因のうち情緒的孤立である【抱えられる関係の不在】のみ退所時の値が低下していた。しかし、対象者は施設入所中に【抱えられる関係】ができた訳ではない。【抱えられる関係の不在】に自身の孤独の原因を帰属しなくなったのである。このことから考えられるのは、【抱えられる関係の不在】因子の項目である「家庭環境に問題がある」や「頼れる人がいない」等の自分ではどうにもならないこと＝自身の外への原因帰属が、施設生活と社会的相互作用を経ることにより低下したということである。入所当初は<現状の言い聞かせ>や<向き合うことの一時保留>をしていた対象者は、施設という安全基地を元に、雇用や職場評価、貯金などを得ていくことで、能動的に<置かれた状況を引き受け>、施設や受け入れてくれる雇用先を内的対象として確立していく。そのことにより、自らを丸抱えしてくれる存在などいないという現実の厳しさをも引き受け、自身と向き合い、寂しさなどの多様な感情を自ら抱えられるようになっていく。入所当時揺らいでいた自己像は、このプロセスを経て「自分を再定義づけ」することにより、主体としての自己像へと変化する。孤独感自体の量は変わらなくても、それを引き受ける自己が確立していくことで、孤独との付き合い方を会得していくのである。

3. 犯罪と社会的関係性～今後の支援に向けて

Maruna²⁰⁾は、元犯罪者の回復に関するインタビュー研究から、回復した人々の特徴として、①本人の「真の自己」を形作る中核的な信念の形成、②自分の運命に対する自己の支配という（有用な「幻想」とさえる）楽観的な認識、③生産的でありたい、社会、とりわけ次の世代にお返ししたいという気持ち、を挙げている。Marunaのいう①の「中核的な信念」とは、刑により自分を一度否定するも、再度「自分を再定義づけ」し、アイデンティティを再構築していく過程で形成されるのではないだろうか。

本調査で特筆すべきは、対象者が様々なサポートを受けてもその抱える孤独感の大きさは変わらない一方、孤独感の質は変化するということである。そして、初めは【抱えられる関係】の不在という外的要因へ自身の孤独の原因を帰属させていた対象者が、アイデンティティが再構築されることにより、【抱えられる関係】の不在を受け止める＝自分で自分を抱えられるようになった可能性が示唆されたことである。

ここにおいて、対象者の孤独感に対する更生保護施設の役割は次のように考えられる。実際には情緒的な【抱えられる関係】が無くとも施設退所時に同因子が低下したことから、たとえ安定した家族関係を再構築することは難しくとも、それを代替する他者との親密な関係や安全な環境を一時的にでも得ることができれば、孤独感の軽減につながる。つまり、対象者は、入所当初は施設の持つ指導・矯正的な意味合いを強く感じている。それでも、施設の＜利用できる面への気づき＞を能動的に行い、その違和感と折り合おうとする。そして、徐々に施設外の社会を探索するようになる。少なからず壁にぶつかりその日を終えることもあるが、施設と職員は変わらず彼らに食事と寝床を提供し、そこに存在し続ける。その相互関係の連続性において、施設はかつて対象者が喪失した、もしくはこれまでの人生で未経験の家＝安全基地を、施設職員との関わりは家族の役割を想起させるのではないか。いわば疑似家族的な関係のもとで、アイデンティティが再構築され、自己を抱えられる自己が編まれるのである。

社会復帰に向かう対象者が、自己を再定義・再構築していく過程として、それまでの人生で未経験の／喪失した親密で温かな家族関係の体験を代替する疑似家族的な関係を施設で体験することの意義は大きいだろう。その体験を基盤として、退所後も地域や職場等で他者とのほど良い関係を構築できるように援助することが、再犯防止にも有効な臨床心理的サポートとして期待されると思われる。また、以上のことは、生き直す自己の形成過程でほどほどに自身を受け入れてくれる環境や他者の存在を内的に取り入れていくということにも繋がる。それらを経ることによって初めて、上記Maruna²⁰⁾のいう②や③の意識が生まれてくるものと筆者は考える。

4. 本調査の限界と今後の課題

本調査において、東京23区内における成人男性の更生保護施設12か所中11か所での調査となったことは、ほぼ都内の対象者については網羅できただろう。今後は、地域差や施設ごとの特色をも汲みこんだ調査が求められる。本調査の限界として以下2点を挙げる。まず、調査1で用いた広沢の研究および尺度は大学生を対象としたものであり、本調査の成人男性と単純に比較できるものではない。対象者の社会関係を反映したより適当な尺度が開発され、それをを用いた調査が望まれるが、現時点においては当尺度が使う最良のものと考えた。次に、調査1の退所時の協力者が少なかったため、退所者全体の動向を反映しているのではない可能性を含んでいる。しかし、この協力者の少なさこそ、施設退所直前の対象者の主体性の変化を反映しているものと筆者は考える。入所直後はいわれるがままに調査を受け入れていたが、退所を間近にして自身の自立に直接的に関係無いものは取捨選択するという心的状況が推察され、それも対象者の主体性再構築の1つのあり方なのではないだろうか。

今後の臨床的支援に関し、調査対象者の社会復帰に向けての具体的な心理的支援の可能性として以下が考えられる。1つは、本研究で示唆された「孤独の価値下げ」、すなわち自身の感情の否定や社会的関係の脱

価値化をしていた対象者が、「自身の再定義づけ」をしていく中で多様で複雑な自身の感情を受け入れ変化する過程で抱えるであろう心理的葛藤への心理的サポートである。もう1つは、本人が孤独の原因をどのような要因に帰属させているかアセスメントをし、現実検討の整理および肯定的なフィードバックによる自己肯定感向上の働きかけである。社会的資源だけではなく、そうした心的な側面からのサポートがより有効な伴走的支援となるだろう。

最後に、本調査では施設の自立退所を社会復帰と意味付けて調査をすすめたが、真の社会復帰は施設退所後に社会内で安定した生活を送れることにある。今後、より長期的視野からの追跡調査が求められる。

謝辞

本論文を作成するにあたり、多くの方々からのお力添えをいただきました。調査にご協力いただいた協力者の皆様、施設職員の皆様に心より感謝の意を表します。

本調査は、平成28年度国際医療福祉大学大学院修士課程論文にて発表し、再分析を行ったものである。

文献

- 1) 法務省. 2016. 平成28年版犯罪白書. http://www.hakusyo1.moj.go.jp/63/nfm/n63_2_5_1_3_1.html 2016.12.20
- 2) 松本勝編. 更生保護入門. 第3版. 東京:成文堂, 2012
- 3) 法務省. 2012. 再犯防止に向けた総合対策. <http://www.moj.go.jp/content/000100471.pdf> 2016.12.20
- 4) 更生保護ネットワーク. 2012. 更生保護施設の概況. <http://www.kouseihogo-net.jp/hogohoujin/institution.html>

- 2016.12.20
- 5) Hirschi T (森田洋司, 清水新二訳). 非行の原因—家庭・学校・社会へのつながりを求めて. 新装版. 東京:文化書房博文社, 2010
- 6) Weiss RS. Loneliness: The experience of emotional and social isolation. Cambridge, Ma:MI-T Press,1973
- 7) Clinton M, Anderson LR. Social and emotional loneliness: gender differences and relationships with self-monitoring and perceived control. *Journal of Black Psychology* 1999; 25: 61-77
- 8) Peplau LA, Perlman D (加藤義明訳). 孤独感の心理学. 東京:誠信書房, 1988
- 9) Peplau LA, Russell D, Heim M. The experience of loneliness. Frieze IH, Bar-Tal D, Carroll J ed. *New Approaches to social problems, Applications of attribution theory*. San Francisco, CA: Jossey-Bass, 1979: 53-78
- 10) 広沢俊宗. 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究 (I). *関西学院大学社会学部紀要* 1985; 51: 157-168
- 11) 広沢俊宗. 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究 (II). *関西学院大学社会学部紀要* 1986; 53: 127-136
- 12) Paugam S (川野英二, 中條健志訳). 貧困の基本形態—社会的紐帯の社会学. 東京:新泉社, 2016
- 13) Jones WH. Loneliness and social behavior. Peplau LA, Perlman D ed. *Loneliness: a sourcebook of current theory, research and therapy*. Hoboken, NJ: Wiley, 1982
- 14) Cutrona CE, Peplau LA. A longitudinal study of loneliness. Paper presented at the annual meeting of the Western Psychological Association, 1979
- 15) 松本直仁, 前野隆司. どのような対人関係ネットワークが主観的幸福感に寄与するか?JGSS-2003 データに基づく対人関係ネットワーク構造に着目した分析. *対人社会心理学研究* 2010; 10: 155-161
- 16) 木下康仁. ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法修正版 グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 東京:弘文堂, 2007
- 17) 田辺裕美, 藤岡淳子. 刑務所出所者の社会再参加に必要な変化と支援: 回復した元受刑者のインタビューから. *司法福祉学研究* 2014;(14): 67-94
- 18) Veysey BM. Rethinking reentry. *The Criminologist* 2008; 33(3): 1-5
- 19) 相良翔. 更生保護施設のエスノグラフィー—「問題」・「変容」・「処遇」を焦点に—. 公益財団法人日工組社会安全研究財団 2012年度若手研究助成調査報告書. <http://www.syaanken.or.jp/?p=2446> 2016.12.20
- 20) Maruna S (津富宏, 河野莊子監修, 伊田和泰訳). 犯罪からの離脱と「人生のやり直し」—元犯罪者のナラティブから学ぶ—. 東京:明石書店, 2013

The nature and evolution of feelings of isolation among residents of a halfway house

Kaoru WAKABAYASHI and Shugo OBATA

Abstract

We evaluated feelings of loneliness among residents of a halfway house to gain insights into how to best support their social rehabilitation. First, a factor analysis was performed to explore the causes of loneliness and their associations with other factors. Three latent variables were extracted, of which delayed release times were associated with only one: the absence of relations that can be holding. Next, residents were interviewed to better understand the social rehabilitation process and its driving factors. While deep self-repudiation characterized the subjects' mindsets early in their residence, they were able to redefine themselves through a continuous, self-reinforcing cycle of traveling between the halfway house, which served as a safe space and pseudo-familial fulcrum, and broader society (e.g., employers). Continual progress and success in redefining the self effectively allowed residents to attribute their loneliness less and less to extrinsic factors, and gave them the capacity to deal with their surroundings and emotions on their own. Our findings suggest that psychological approaches to rehabilitating halfway house residents would be most useful if they focus on helping them to identify the root causes of their isolation, learn how to cope with those emotions, and come to terms with the myriad and complex internal conflicts that arise in the self-redefinition process.

Keywords : halfway house, loneliness, social rehabilitation